

死の家の記録

映画文学人生論

ドストエフスキー『死の家の記録』 望月哲男訳
工藤精一郎訳
『地下室の手記』 安岡治子訳
参考：ソルジェニツィン『収容所群島』 木村浩訳
長谷川四郎『シベリヤ物語』
山崎豊子『不毛地帯』

シベリアの遠い果て、草原か山か人も通わぬ森林ばかりのところに、ぽつりつりと小さな町がある

シベリアはウラル山脈を西の境界として太平洋岸まで続く広大な地域で、十七世紀末までにはロシアが勢力圏に収めた。ロシアによるシベリアの開発はアメリカの西部開拓史とよく比較される。

アメリカの西部開拓とちがうのは、シベリアが犯罪者の流刑地として大規模活用されたことである。犯罪をおかした農奴や放浪者や政治犯が、シベリアに続々と送り込まれたのだ。死刑に処すよりは安い賃金で開発に従事させたほうが国家経済にとつては益になる。

『死の家の記録』は、ドストエフスキーが政治犯としてシベリアのオムスク要塞監獄で過ごした一八五〇年から五四年までの四年間の記録だが、記録の作者はアレクサンドル・ペトローヴィッチ・ゴリンチコフという地主貴族という設定だ。

ゴリンチコフは、妻を殺した罪で第二種流刑懲役囚となり、法によって科せられた十年の刑期がすぎた後、入植者としてひっそりとい目立たずに余生を送っているという小説的な脚色をほどこされている。

小説ではなく、記録だとしても、作家ドストエ



死の家の記録

映画文学人生論

フスキの誕生はシベリアの監獄での四年間の体験ぬきには考えられない。彼はさまざまな身分、多様な民族の囚人たちを観察して、人間性についての洞察を深める機会に恵まれた。

そのチャンスを生かしてロシアの代表的文豪になることができたのは読書によってつちかわれた彼の観察力と思考力、文章表現力のたまものだ。

ドストエフスキの分身であるゴリンチコフは書物の話以外は何一つ理解しないし、理解する力もない人物として描かれている。貴族で金を持っているので囚人たちは彼から金を借りるために近寄ってくるが、借りた金は返さないし、ものは盗む。他の囚人たちもそんな彼をバカにする。

貴族出の囚人は、監獄ではたいてい暗い、敵意のこもった目で見られるのだ。一般の囚人たちは決して貴族出の囚人を仲間と認めようとしめない。

しかし、四年間の監獄暮らしの最後になると、ドストエフスキにはそれが暮らしやすいと感じるようになった。囚人たちの間にたくさん友人知己ができた。彼らは結局、ドストエフスキを良い人間だと認めてくれたのである。かくして、複雑な人間心理にたいする深い洞察力を持つ作家がシベリアから誕生した。

ガキの頃には楽しく暮らし

自分の財産持っていた

若気の至りで財産なくし

監獄暮らしの身となった